

# No. 1091

## 失望と期待

昭和47年7月5日、自民党第27臨時党大会で田中角栄は総裁に選ばれた。「決断と実行」をモットウに日本列島改造論をひっさげて誕生した田中首相は国民から期待されていたのだが……。

青森県六ヶ所村。開発区域に指定されたこの村は開発賛成派と反対派に分かれ大きく揺れ動いた。白鳥のやってくる湖も開発の暁には大きな港になるという。

そして全国的に地価は暴騰を続け、土地付マイホームは庶民にとって遠い夢となっていった。

第71特別国会でも田中首相は「四半世紀の間に日本はかくも発達した。これまでの経済政策は間違っていない。私は日本列島改造論を下げる意志はない」と言明。内に福祉外に協調をかかげ田中外交は精力的に進められた。

ハワイでのニクソン大統領との会談につづいて長年懸案であった日中国交正常化をめざし北京を訪れた。そして「戦争終結と日中国交正常化という両国国民の願望の実現」をうたった共同声明に調印、順風満帆の田中外交であった。しかし、昭和49年東南アジア5ヶ国訪問で田中首相がみたものは、エコノミックアニマル日本に対する痛烈な批判であった。

そして国内でも公共投資を含む大型予算の中でインフレは進み昭和48年秋の石油ショックを発端に日本は暗く寒い時代へとむかっていった。

政府は大蔵大臣に福田氏を起用、角福提携でこの難局を乗りきろうとした。しかし笑顔は次第に国民から消えていった。倒産は相次ぎ、物不足に人々は行列をつくらねばならなかった。国民生活に追いつけかけないように公共料金の値上げが発表された。そして怒りは春闘に爆発。スローガンにはじめて弱者対策がもりこまれ人々は口々に田中内閣打倒を訴えた。

田中内閣支持率は下がる一方であった。そして迎えた参議院議員選挙。野党は保革逆転を叫ぶ。結果は社会党共産党がこのインフレを背景に議席を増し、保守、革新の差はわずか七議席となった。糸山議員の組織的な買収金権選挙の発覚と参院選の敗北の中で金権選挙を批判し党の近代化を訴え三木副総理が辞任、続いて保利行政管理庁長官福田大蔵大臣も相次いで辞任、政局は混迷の一途をたどった。揺れ動く田中内閣に田中首相の金脈をえぐった特集記事を載せた「文芸春秋」10月号は決定的打撃となった。

第二次外遊から帰国した田中首相は記者会見し「私は地位利用をやっていない」と言明したものの歯切れの悪い内容であった。田中首相が招いたフォード大統領の日本滞在期間中延命したものの離日後の11月26日田中首相は退陣を表明、2年4ヶ月の田中政治は幕を閉じた。その歩みは、国民不在の政治の歩みであった。

世の中は、不況風が荒れ狂い様々な業種に倒産は続き失業者は増え、人々は泣くだけであった。自民党本部では話し合いの中でこれまで党の近代化を叫びつづけてきた三木武夫氏を総裁に選んだ。12月9日首班指名を受けた三木総理は副総理に福田赳夫氏を大蔵大臣に大平正芳氏を文部大臣には20年ぶりに民間から永井道雄氏を起用三木内閣はスタートした。

この不況の中で一刻も早く国内政治の安定をとという国民の期待をになって。